

チェルノブイリ風下汚染地のひとびと

2011年3月26日 こんしん

(山河君主宰のタウン誌に向けて)

ベラルーシの南部を、西はポーランドとの国境方面から東に流れ、ロシアとの国境際でこんどはモスクワの北方から流れ来るドニエプル河と合流して90度に 曲折して南下をし、ウクライナの首都キエフを経て黒海へとながれる「プリピヤチ河」。

この二つの大河の合流点は三国の隣接地であって、またそれぞれの国の辺境でもあります。このウクライナ領にチェルノブイリ原子力発電所があります。

この大河の流域はこまかな河川がクモの巣のように織りなした低湿地帯で、森や平野に沼の恵みが堆積し、世界の地理の授業で習ったことのある世界の三大沃野の黒土地帯なのです。ベラルーシはヨーロッパへの食料供給の穀倉地帯でしたが、1986年4月26日のチェルノブイリ4号炉の爆発で飛散した核物質の80パーセントがこの地に降り注いだといわれています。高濃度に汚染された農地は放棄され住民は強制移住させられポツカリと無人の空間となり、破壊されたお家と静かな自然へと回帰する原野の景観へと、いま移り変わろうとしているのです…。

☆

この見捨てられた村々が賑わう時があるのです。沖縄の清明祭のように四月の満月の後、「ラドニツア」という先祖供養祭がおこなわれるのです。強制疎開に離散した村人が、それぞれの移住先からこの日に集まって来て墓地のまわりは車だらけになります。どのお墓の前も敷き布をひろげごちそうを並べウオッカを注ぎ合って、最後は老弱男女のおどりの輪で盛り上がるのです。通過者ではない「旅人」であるボク等が通りかかると、何処から来たか何の用で歩いているかの誰何もなく、酒盛りの輪の中に招き入れられるのです…。

☆

埋葬された死者を掘り起こし、レントゲンネガに感光された臓器や筋肉の映像を示して、この方々は体内被曝が原因で死亡したのだとの根拠を公表されたベラルーシの物理学者は、ミンスク郊外に国際援助でつくられた子供達の保養施設へ案内して下さる車中で、「外国からの子供達の健康回復の招待がきます。でも、わたしは放射能の専門家です。汚染のない綺麗な地区があるのです。外国へ子供を連れ出すような多額の金銭があれば、選ばれて旅行できる子供の数百倍のこどもを受け入れる施設を国内へつくれます。わが国がとても到達出来ないレベルの消費社会にこの子等が晒されるのは残酷です。いま大事なのは、子供達へふかい哲学を学んでもらいたいのです。わたしの言う哲学とは、ことばです。信仰です。文学です。伝統音楽、民族芸術です。家族が大事に尊敬しあって暮らすことです…。そういうベラルーシ民族の誇りとしてきたことをいまこの国の中で学んでもらいたいのです。そしてその子たちがこれからこの国を再興させるのです…」と。